いま新潟県の教師に期待するもの
―教育をめぐる歴史的危機の中で―

小林昭三

否定である。何がそう言わせるのか、それは見えない体罰である。

・忘れ物をしたらカードに×をつけて、いくつか×がつくと、グランド二十周、三十周と、させられる。（小五）

・忘れ物をしたり、宿題をして来ないと、反省文を二十枚書かされる。（小六）

・音楽の時間に、変な音を出したり、まちがえたりすると、「ブンブン蜂が飛ぶ」と言って、両ほほを引っぱられる。（中一）

・指示された所まで勉強して来ないと、手の甲をつねったり（青くあざになるほど）顔や手にハンコを押される。（中三）

これらについて思うことは、教師と子どもにおける「何故できなかったの？」「どう思っているの？」という問いと、答えの短さである。教育を人間を育てるという視点から真正面にとらえた時、そういう問いこそ重要なのではないか。とりわけ、子ども自身が自分を問う面を鍛えることが、今一番欠けている点ではないだろうか。

ある中一の男の子は、こう言う。「あすなろには、むずかしく言えば、人生の勉強っていうか、そういうのを求めて来ています。あとは、もちろん勉強。特に、学校でわかんない所で聞けなかった所は、ここではリラックスして聞けるからいいです。」彼の言う「人生の勉強」というのは、私と戦争のことで議論したり、世の中の問題について話ができることなどを指している。彼のように、子どもたちは、ひょっとしたら、教師と生徒という範囲を大きく越えた所で、同じ人間としての話がしたいのではないだろうか。つまり、子どもと教師の関係に、もっと濃い人間的な関係を求めているということである。

今、子どもたちの問題状況を考えた時、主体的な子どもを育てているつもりが、実は受け身の姿勢の子どもを育てていたり、人間性豊かな子どもを育てているつもりが、なかなかそうはなっていない中で、私たちはそのことをリアルに見つめ、逆転させていかなくてはならない。たとえ、本来の教師集団さえ作れず、バラバラな傾向が強い現状でも、子どもを何とか良くしたい、豊かに発達させたい。人間らしく育てたいという点でこそ一致できるはずである。何故なら、それは教師の良心だからである。子どもの発達を阻害させる要因に対しては、どんなことがあっても教師集団が連帯するということを、私は望みたい。

また、教師に対する管理強化にしても、目の前の子どもたちをどうするかという点でこそ、一致して欲しいのである。

私一人の小さなあすなろ塾でさえ、六十人の子どもたちが生き生きして通って来ているのである。さまざまな知恵と能力を持った教師と職員が真に手をつなぎ、親や地域の人々も巻き込んだ形で学校づくりができないはずはない。やれる所からその一歩を進めて欲しい。県内のあちこちで、その小さな典型が作られていったらどんなにすばらしいことだろうか。私も、地域から精一杯に力を尽くしていきたいと思う。

（塾教師）

臨時教育審議会(臨教審)を錦の御旗にした超反動的策動のもとで、いつかきた道、戦前の暗黒の時代をいま再び歩み始めるのか、それとも暗黒の歴史の教訓から学んだ民主的で科学的な国民的教育運動を築き上げて、これを阻止するのか、いま重大な歴史的選択がせまられつつある。

こうした、歴史的危機に直面しつつあるいま、新潟県の教師に期待されるものはなんだろうか。かつて、多くの人が知らずに暗黒の道にかりたてられてしまった無念さを、いまこそ科学的教訓として骨肉化し、いかに未来を切り拓き得る「知」＝「力」とするのか。子供の未来に対する歴史的責任をいかにはたすべきか。さらに、最も反教育的権化である「闇の将軍」をも、最も身近に追い詰め得るまで、いかに民主的教育基盤を強めるのか。教育委員会の非公開、国旗掲揚・君が代斉唱を押しつけ、小中教員における学閥支配、等、深刻で重大な問題が山積している。

1　教育をめぐる嵐の中で

教育をめぐる環境は、生徒にとっても教師にとっても父母にとっても、かつてなく悪化している。これらすべてを逆手にとって、悪用だけして、臨教審を発足させ、教育反動化の「百年の計」・教育臨調をいまこそ中曽根内閣は強行しょうとしている。

臨調行革が開始される以前は、国鉄職員攻撃と国鉄分割・民営化論が今のように公然とまかり通る、ひどい情勢を想像することは困難であった。教育臨調の中でも、同様の教職員攻撃と教育の民営化などの世論作りが、どのように周到に準備されるか、容易ならざる情勢にある。その策謀を打ち砕くことのできる国民的大運動をいつでも対置できる力量、信頼、結びつきを培わなければならない。

中曽根内閣は、臨調行革という、平時にはクーデター以外には出来ないことを、大きな国民的な舞台装置を作り、「名優」を登場させトップダウン方式によって強行してきた。土光臨調のやり方の最大の特徴は、二年の任期中に小刻みに審議経過、中間報告、答申を次々と出して、その都度マスコミに大々的に取り上げさせ、いやおうなく世論を誘導するというファッション的戦略にある。「会議の内容を、意識的、無意識的に外に漏らしていくという行き方をとった。……固有名詞は漏らさないという点だけ……それ以外のことは外に出していくことによって、マスコミがこれを取り上げていろいろ書いてくれる。それがまた国民に問題意識を与え、そして一つの流れができていくと判断したのである。（瀬島元軍参謀談）」

臨教審においても、このようなやり方が始まりつつある。今までのような、中教審答申による攻撃にたいする取り組みのようなスタイルでは、とても太刀打ち出来ない。最近、新聞ではまさにこの種の情報が臨教審から意識的に流されつつある。教育の自由化が必要とか、管理教育の問題点など書かれるが、学習指導要領の法的拘束性や数科書の統制をいっそう強める方向がとられようとしていることは明白である。教育免許法改悪や教科書法による国定教員と国定教科書作りとが、より大がかりに狙われよう。

臨教審でいう自由化とは、教育の民営化であり、財界と資本が教育市場で投資と金もうけを自由に出来るようにすることを意味している。だから、国立、公立の学校は国が、そして私立の学校は経営者が、勝手に教育内容や方法を決定し教師を思いのままに管理できる大幅な自由を与えよ、ということになるだけである。「教育行政分野の許認可など、各種規制を緩和し民間活力を積極的に導入する。」「義務教育を見直し学校の民営化など学校制度の自由化を図り、競争原理を導入する。」のような項目が、その後審議項目として新に追加された。いきつく先は、このようにすでに決まっている。いささかの期待をもつことも許されない。

教育荒廃の真の原因が自らの誤った教育統制の政策にあることを、これまで政府は一貫して覆い隠してきた。その帰結である、受験地獄や画一教育、競争原理の強化などを逆に戦後教育理念の結果であるとしてすりかえる攻撃すらはばからなかった。ただ、教育の支配管理を

国と民間資本に多元化するために、教育荒廃を利用できればよいのである。だが、教育の自由化は、さらに競争原理を強化し、教育荒廃を進行させることは、火をみるよりあきらかである。

新潟の教師には全国の教師と共に、公教育のあらゆる管理強化、即ち、一方に於ける国家意志の通りやすい画一的な旧師範学校化、さらに他方に於ける資本による教育の支配強化、のいずれにも毅然と反対し、真の教育の改革とは何かを広く国民に知らせて自ら実践することが期待されているのではなかろうか。しかも、それが日本の未来を選択するという、歴史的使命であることを自覚しつつ。

2　真の教育の改革とは

「とにかく、国民の中に今まではともかくだめで、何か改革しなければという気運さえ作り出せばよい」というのが臨教審戦略。画一化の弊害を説きつつ、教科書と教員養成の画一化が図られ、受験戦争の弊害を言いつつ、私学による競争原理の強化を平然と図る。

政府側の本音は、美辞麗句とは裏腹に、すべて超反動的で財界本位である。「出来るものなら、師範学校制度を復活させたいが、現状では無理である。そこで実質的には教員養成学部以外では教員免許がとれないようにしてしまう事を考えている（関係者談）」。「教育の自由化の推進は、教育界の世界に生き生きした競争原理を導入し、教育界の閉鎖性と停滞性を打破していく」「生徒同士の競争ばかりでなく、先生同士の競争も……」（京都座会）。

そこには、日本の未来をになう青少年のすべてに、いかなる基本的文化や科学の基礎や言語、数量認識などの国民的基礎教育を実現しようとするのかの方針が根本的に欠如している。教育するに値する教育内容にたいする考察がない。それを持たない底の浅い「教育改革」の繰り返しが、今日の政府の教育政策の貧困をもたらし、また、どうにもならない手詰りな現状をもたらしてきた。あらゆる具体的な教育内容の面で、法的拘束力をもたせた「学習指導要領」の名のもとに、いかに今日の破綻がもたらされてきたかを、今こそ明確に主張すべきではなかろうか。

例えば、自然科学の教育の分野では、最近にわかに低学年理科の廃止の方向が政府筋の委員会から打ち出されて来た。自らあれほど賛美し、法的拘束力を持たせて学習指導要領により押しつけてきた、低学年理科を、いまや、無責任に廃止することでしか、自然科学を真面目に教えることを怠ってきた自己矛盾からのがれることができないという、御粗末な政策である点に、その本質をもつ。教材の開発や研究実践が指導要領により妨げられて来たなかでも、皮肉にも、今後も継続に値する数々のすぐれた低学年理科の教材が作られて来ているという現実を見ずに。

教材を配置する科学的論理を欠くなかで、戦後指導要領の改定の度ごとに、整合性を欠き矛盾だらけの小学校及び中学校の理科になってきている。そして、困難はすべて高校にまで先送りされ、高校は矛盾の集約点となっている。ここにメスをいれる事は、現場で責任をもつ教師にしかできない。真の教育の改革は、そのような教育現場の格闘からしかありえない。小学校から中学校にかけてどう一貫した自然科学の教育のプログラムを作るのかが問われているとき、低学年理科の廃止・幼稚園と小学校の一貫や中学と高校の一貫問題にすべてをすりかえようとしても、困難は回避できず破綻は免れ得ないであろう。

臨教審による、ペテンとファッショ的手法に基づく性急なニセ教育改革はこうした現象をあらゆる教育の分野にもたらすであろう。「体・徳・知をかねた人づくり（瀬島臨教審委員談）」なるスローガンの底はすぐ見える。これまでの教育の歴史を振り返ると、戦争が近づくと必ず真の「知」の分野が軽視され、代わって戦争への精神と肉体の動員につながる「体・徳」の分野が重視された。しかも、その軽視された「知」の中でも、読み・書き・計算（そろばん）の重視という明治的教育用語が目立つ。すぐに役立ち、すぐに必要とされなくなる小手先の実用本位の教育の失敗を、今また繰り返そうというものである。

以上のような非科学的教育政策から決別して、歴史の主人公になり、社会発展のためのにないてとなりうる人間を教育するという、本来の教育の在り方に立ち返り、ひとりひとりの自立した教師が真の教育を追求実践しうる、教育条件を整備する教育改革こそ必要とされている。地域に根ざした民主的学校づくりこそ、その出発点になろう。

3　学閥支配の打破をめざして

最後に新潟の教育界の後進性の源泉には、旧新潟師範（常盤会）と旧高田師範（公孫会）を頂点とする管理職ポストと人事異動をめぐる利権を目的とする、学閥による支配がある事に触れざるを得ない。新構想大学の上越教育大と、新潟大学教育学部の存在をてこに学閥支配が再編強化されようとしている。又、昨今の教員採用試験競争の激化を競い合うという図式により、学閥支配の強化の動きさえある。角栄支配と同様、およそ非教育的虚構であり、新潟の教育の改善を本質的に疎外する最大の要因といえよう。自主的教育改善の取り組みが必要とされているとき、利権を最大の目的とした閥の支配からの自由は、何よりも身近かで緊急な前提条件であろう。いまこそ勇気をもって力を合わせ、何ものにもとらわれない自由な精神を持った教員の団結により、新潟における学閥からの自由を獲得したいものである。

（新潟大学教育学部教授）

私学教師とその組合の立場から

田村　誓

与えられた標題は「今、新潟県の教師に期待するもの」というものであった。

しかし、私自身、教育の現場で実践にとりくんでいる教師の一人である。「期待される」側である。従って与えられた標題で私が書くわけにはいくまい。新潟県の私学教職員の組合の立場から、教師への期待をどううけとめ、どうとりくんでいるか報告してみたい。

新潟私教連は結成以来十余年間、その闘いの中心は県民に支持される私学づくりであった。それは、そうしなければメシの食い上げになるという私学のおかれた厳しい立場からくる必然的要請だったことも否めない。しかし、この私学危機の慢性化の中で、教師自身がこの課題を普遍的なものとして受けとめてきていると胸をはっていいのではないか。

そうでなければ毎年毎年、五百人の組合員教師が二千軒を上回る家庭訪問をやりぬき、既成のＰＴＡの充実と併せて、四千人の父母の会会員を組織し、五十万の署名を集める原動力は説明できない。

私学は教師が学校と運命共同体だ。転勤がないから、学校を良くし